

私たちは「なぜ 国定公園昇格を選択するのか」

<はじめに>

- ・国連の生物多様性条約第 15 回締約国会議(COP15)は昨年 12 月、各国が 2030 年までに取組む新たな生態系保全目標を採択した。23 項目の個別目標からなり、世界全体の陸地と海の少なくとも 30%を保全(30by30)することなどが柱となっている。
- ・環境省は目標達成のため、2010 年から実施している国立・国定公園総点検事業のフォローアップを行い、昨年 6 月に国立・国定公園等の範囲拡張などの候補地リストを発表。候補地は継続の 8 地域に新たに 6 地域を加えて 14 地域(実際 23 地域)となった。
- ・環境省の候補地拡張パターンは大きく三つに分かれている。その一つは候補地のほとんどが既存の国立・国定公園の拡張グループ。二つ目は同じく既存の国定・都道府県立公園を拡張し昇格させる新規指定グループ。三つ目が大規模拡張地域としてリストに加わった「八幡平周辺」の四つの県立自然公園で、十和田八幡平国立公園への編入か、または国定公園の新規指定のいずれかを選択するタイプである。
- ・森吉山は「八幡平周辺」の大規模拡張地域(森吉山のほかに真昼山地・田沢湖抱返り溪谷・太平山)に選定された。環境省は、国立・国定公園の指定地域とのギャップ分析や自然環境調査の結果を踏まえ、2030 年までに拡張区域や地種区分の格上げを視野に十和田八幡平国立公園への編入か、国定公園として新規指定するかを提案することになる。
- ・環境省は公園区分の選択を、社会環境等の観点(地域の意向・管理体制・全国配置等)から検討する。特に自然公園の名称変更が伴う公園区分の選択は、「関係市町村の意向を尊重して決定したい」との見解を示している。
- ・そこで私たちは、森吉山について「なぜ 国定公園昇格を選択するのか」、地理・公園名称・歴史と文化・整備財源と誘客促進・観光動向などの検証から、その考察を述べたい。

(1) 地理的要素からの考察

- ・森吉山の選定理由の一つに、環境省は八幡平と同様の火山地形であることを挙げている。森吉山から玉川温泉焼山地区までは、火山活動に由来する標高 650~800m、延長距離約 10 kmの火砕流大地(溶結凝灰岩)で形成された東麓の奥森吉と奥阿仁を挟んで隣接しているが、地理的には連山の形成はなされていない。
- ・また、十和田八幡平国立公園の十和田八甲田地域と八幡平地域は、直線距離で約 50 kmと南北に二分された国立公園である。山体のピーク間はそれぞれから約 80~100 kmに及ぶ。
- ・従って、森吉山は十和田八甲田地域との距離感や八幡平地域との地理的連続性からして、同様の火山地形を理由に同国立公園の一角に吸収される山塊ではない。
- ・森吉山は火山体として他県にまたがらない、秋田県のほぼ中央部に位置する県内唯一の独立峰であることから、古来より秋田山と呼ばれてきた。阿仁川は本流大又の奥阿仁、小又川の奥森吉を集水域とし、その中心核に十二単を着飾った森吉山本体が鎮座する。
- ・河川と山塊の分水嶺によって生活圈や文化圏を異にする日本的風土感からすれば、北秋田市阿仁部から日々の眺望がかなわない十和田八幡平国立公園との距離感には大きな違和感を覚え、その溝は埋めがたい。

(2) 歴史的・文化的要素からの考察

- ・森吉山地域と十和田八甲田地域は距離的に離れているため歴史や文化的つながりは薄いですが、森吉山県立自然公園と接する八幡平地域の玉川温泉とは、古くから湯治を目的とした人々の往来があった。奥阿仁と奥森吉から赤水峠を經由して玉川温泉に至る「湯治場古道」の証しとしてブナの幹に刻まれたナタ目が散見され、古いものでは大正年代のものが確認できる。
- ・この湯治場古道の復活整備計画は、1994年に森吉山県立自然公園の大幅な公園計画の見直しが行われ、奥森吉・奥阿仁と玉川地区をつなぐ「車道計画」が自然環境の保護保全の観点から「回廊型歩道」に変更された。この公園計画は国立・国定選択議論に関わらず復活させなければならないトレッキングコースである。

(3) 森吉山が十和田八幡平国立公園に編入された場合の名称変更の考察

- ・森吉山の国立公園編入が選択されると「森吉山〇〇公園」という森吉山の冠が消える。平成の町村大合併に伴う北秋田市の大字名の廃止に続き、自然公園の名称からも消え「十和田八幡平国立公園」の名の下に埋もれてしまうことになる。
- ・当然ながら、総合観光案内などの表記や観光冊子に至るまで、十和田八幡平国立公園の一部に包括された姿で紹介される。冠を守るとすれば当然のごとく「森吉山国定公園」への指定を目指さなければならない。
- ・森吉山、真木真昼山地、田沢湖等(以下3公園)が国立公園に編入された場合、青森県には十和田市があり、岩手県には平成の大合併で八幡平市が誕生するなど、公園名を冠となす自治体が存在する限り、現在の公園名称変更は無理であろう。
- ・それに3公園の冠名称が「十和田八幡平国立公園」の森吉山、真木真昼山地、田沢湖等になることもまた、十和田を冠にする限り地理的違和感は拭えない。地元や県民世論の納得を得ることは困難であろう。
- ・佐竹知事も「国立・国定の区分もあるが、まずはこの機会を逃さないように県としても力を入れていく」との考えを示すにとどめている。(2022.12月 県議会予算特別委員会総括審査)
- ・また、津谷市長は要望書提出(2023.2月)の懇談において、「山岳関係者の皆さんが国立昇格ありきでなければ、一気に国立昇格ではなく、北秋田市単独である森吉山は国定公園の階段を踏んでからでもよいのではないか」との考えを述べた。

(4) 森吉山は既存面積で国定昇格し自然環境調査でさらに拡張へ

- ・森吉山県立自然公園(15,214ha)は、他町村に跨らず北秋田市一市に鎮座し、単独で国定公園の指定要件を満たしている。国定公園昇格を早めるには環境省の自然環境調査を待たず、秋田県が既存の公園面積で環境大臣に所定の申し出を行えば4年以内の昇格も可能である。
- ・長野県の中央アルプス県立公園は、環境省の国立・国定公園総点検事業に頼らず、長野県が2015年に地元自治体から国定公園化の要望を受けて準備を開始した。2016年に環境調査を実施。2017年に公園計画と指定書素案を作成。2018年に地元3自治体で説明会を実施し2020年に3月に国定公園昇格を果たした。
- ・森吉山はまず既存の公園面積で国定公園化を目指し、その実現後に環境省の自然環境調査に基づいて拡張区域を加えるという二段階方式で保全地域の拡大を目指すべきである。

- ・また、田沢湖抱返り溪谷(7,477ha)と真昼山地(5,903ha)は単独で国定公園の面積要件(10,000ha以上)に満たないため、選択肢として国立公園に編入するか、または統合して国定公園の新規指定を目指すことになるが、和賀山塊～真木真昼山地の県境をまたいで岩手県側の拡張調査も必要となるため、2030年までの自然環境調査完了は無理であろう。
- ・いづれにしても環境省の3公園の国立公園編入論は、十和田八幡平国立公園の発展的分割を視野に、別ステージの議論が必要である。

(5) 三位一体の改革に伴う自然公園等事業の考察

- ・国立公園は、環境省が全て交通インフラや各種施設の整備事業を推進しているという思い込みがあるが、財政面や制度上の立て付けは期待通りではない。
- ・特に、三位一体の改革(2005年)に伴い国立・国定・都道府県立公園に関する地方と国の役割分担が明確化され、これまで主力だった自然公園等整備費補助が廃止された。

①都道府県立自然公園については

- ・国立・国定公園以外における奨励的国庫補助事業は全て廃止された。
- ・都道府県立自然公園等の国庫補助整備事業は全て廃止された。(このことが過去の国定公園昇格要望の大きな理由であった)

②国定公園については

- ・都道府県に対する国庫補助制度が廃止され、代わって新たに自然環境整備交付金を創設。
- ・地方は自然環境整備等交付金(事業費の45%が交付金算定)を基に従来の公園事業を行う。

③国立公園については

- ・従来、主力だった都道府県に対する国庫補助事業が廃止された。
- ・地方は自然環境整備交付金(事業費の50%が交付金算定)を基に従来の公園事業を行う。
- ・国は直轄事業の拡充を図るため、特別保護地区や第一種特別地域の歩道整備を含めた。しかし、国の直轄地であっても特別な保護保全対策を必要とする地区を除く登山道の整備は地方が行っている。長野県では県・松本市・安曇野市の負担金に一般登山者からの協力金で補修材料を山小屋に提供し、ヘリー代等の運賃は現地の山小屋の負担になっている。
- ・環境省もグリーンワーカー事業の一環で歩道整備に負担金を出しているが、むしろ地方が直接管理する国定公園の歩道整備の完成度が高いと言える。
- ・環境省は歩道の整備は積極的ではなく、集団施設地区の整備が主体である。

④交付金のまとめ

- ・整備事業の内容や都道府県と市町村の負担割合は各地域の実情を踏まえ独自に設定が可能。計画期間は3～5年、総事業費は2000万円又は4000万円を超えるものが対象となる。
- ・秋田県の市町村負担割合は、事業費から交付金額を差引いた額の20%である。
(例：事業費1億円の市町村負担額は、国立1,000万円・国定1,100万円)

(6) 誘客関係の推進

- ・環境省は国定公園になると国立公園と合わせて国内外にプロモーションを行う。
- ・国定公園は58と多いが、単独の森吉山国定公園として紹介されるメリットは大きい。
- ・環境省は、2023年度「国立・国定公園の自然を活用した滞在型コンテンツ創出事業」の募集を開始。自治体や観光協会、ガイド事業者等からなる協議会が実施する自然公園法に基づく自然体験促進計画(ソフト事業)の策定に係る経費の一部を補助(補助率2/3～1/2)する。

(7) 北東北の自然観光の動向

①北東北の十座十湯をめぐる

- ・日本列島は 300 万年前から始まった海洋プレートの東西圧縮に伴う隆起と火山活動によって山国となった。北海道から九州まで南北 3000 km に及ぶ海洋性気候が育んだ山懐には箱庭のような溪谷と温泉群が連なり、3 万本の川と山と海の幸が多彩な食文化を醸成した。奇跡の国「絶景列島ジオジャパン」と称されるゆえんである。その北東北の山群に連なる森吉山もまた、宝石箱を散りばめたような千変万化の桃源郷を形作っている。
- ・そうした魅力的な「北東北の十座十湯めぐり」は、次のようなコースが代表的だろう。新幹線を降りたら栗駒山から北上して早池峰山、南部富士岩手山、八幡平を闊歩し、秋田駒ヶ岳と乳頭温泉郷から神秘の田沢湖へ。花の百名山森吉山では奥阿仁・奥森吉の懐に湖やクマゲラの森、溪谷に名瀑群を訪ねる。十和田湖から奥入瀬と蔦沼をめぐり八甲田山の頂を踏んで津軽富士岩木山をゴールとする。さらに白神山地をまたいで、十二湖から男鹿半島へと日本海を南下する。出羽富士鳥海山を迎えれば「北東北の十座十湯をめぐる」熟年男女たちとの山旅は完歩する。これが「みちのく山旅観光」の姿である。そして、若い世代には北東北の魅力を感じられるロングトレイルのワンダーランドとなろう。

②ぐるっと森吉山をめぐる

- ・ぐるっと森吉山をめぐる一年を紹介したい。極寒の巨人たち(樹氷)が雪中行軍を終えると山笑うブナ林の眩い春紅葉が峰を走る。新緑のブナ林はハルゼミの蝉時雨。花の百名山は春の妖精たちの乱舞に続き、盛夏はニッコウキスゲなどの猛烈美人たちの舞踏会場だ。湖・溪流溪谷・名瀑群をめぐるウォータートレックは天国の散歩みち。巨木が群立するクマゲラの森を逍遙するトレックは、やがて錦秋の雅からセピアの森へ。四季彩めぐる懐にはフォトトレッカーが集う。冬将軍が日本三大樹氷原をつくる頃、山はまた一つ齢を重ねる。
- ・森吉山は、どんな季節も、どの瞬間も、妖艶な雰囲気醸し出して旅人を呼び込む山容が特徴である。「ぐるっと森吉山」の、あまたのビューポイントは、十和田八幡平国立公園のものではなく、森吉山ブランドを磨き上げるフィールドである。
- ・国立公園指定から 87 年の十和田八甲田地区と 67 年になる八幡平地区。長い歴史を刻んだゾーンの一部に森吉山が編入されれば、森吉山のブランド化を進めることは難しい。知名度や温泉資源と宿泊客の収容力で圧倒的優位に立つ老舗の国立公園ゾーンに埋没してしまうだろう。
- ・国立公園編入が道理であるとするスパイスを振掛けても、利用の増進は一朝一夕に叶うものではない。森吉山オンリーワンの創造力と発信力を高めるには、他の山岳観光地との結節点になり得る北秋田市の官民がどんな知恵を出し行動するかに懸かっている。

③山旅観光のマインド

- ・人気が高まっている山旅観光は、花の名山と 100~300 名山の難易度に温泉郷や秘湯を加味してフィールドを選択する。その選択肢に公園区分のブランド条件は希薄だ。行ってみたら都道府県立・国定・国立公園であったに過ぎない。
- ・SNS 全盛時代において、国立ブランドで人は動いていない。いつ・どんなとき・どこへ行けば、どんな遊び・どんな食・どんな出会いが待っているのか。そこに見るべき絶景や異文化に触れる非日常の体験空間があれば、人は地球の裏や極地まで飛ぶ。それが観光である。

(8) 「森吉山」という冠は地域住民のアイデンティティ

- ・北秋田市は平成の町村合併で、「早期の一体感醸成のため」という訳の分からない理由で住所地から大字名(森吉町・合川町・鷹巣町)を捨てた。県北地区の玄関口として北秋田市に開港した空港も「あきた北空港」という愛称名を捨て、「大館能代空港」という地理的に合点がいけない曖昧な名称で決着した。
- ・そして、令和の世に入り森吉山に十和田八幡平国立公園への編入か森吉山の国立公園昇格という選択肢が国から示された。環境省サイドは八幡平周辺にどのような絵を描くかが課題とだと言う。しかし先の北秋田市主催の「6.24 シンポジウム」ではその考えを伺う機会が拒否された。
- ・今般のフォローアップが「陸と海の30%保全」という目標達成のため、「公園区域の拡大と昇格」を地元の協力を得る手段として位置付けてはならない。「公園区域の拡大と昇格」は保護と利用の増進を図る上で、そして「自然公園の名称変更」は地域にとって将来的に大きく影響する一大テーマであるからだ。
- ・地名・名称・総称・固有名詞は、歴史的・文化的・民俗学的遺産であるのみならず、山岳信仰が山に山格ならぬ人格を与えたように、地域住民にとっては、自分というものを確認するアイデンティティそのものである。
- ・森吉山の冠を捨て、十和田八幡平国立公園の中の森吉山に甘んずる意味とは何か。名を捨て、実を取る意味はあるのか。見返りに得る果実は今のところ見当たらない。

(9) 独立峰森吉山の旗印は「森吉山国立公園・ジオジャパン Mt 森吉」である

- ・環境省サイドは、乳頭温泉郷地区に十和田八幡平国立公園分割論があることは聞いているが、今般のフォローアップには分割計画はないとのことである。
- ・森吉山を十和田八幡平国立公園に編入するとすれば、国立公園の八幡平地域を分割し、例えば「八幡平森吉山国立公園」という名称がかなうとするならば、国立公園編入も受け入れる余地はあるであろう。しかし、この公園名の実現は、田沢湖抱返り溪谷や和賀山塊・真木真昼山群も勘案した場合、それぞれの地域感情からみて相当難しいだろう。
- ・「ぐるっと森吉山」を核に、どんな観光地づくり、どんなマチづくり、を目指すのか。十和田八幡平国立公園という老舗の暖簾に頼ることなく、独立峰「森吉山国立公園・ジオジャパン Mt 森吉」の御旗を選択したい。その実現に向けて、「ぐるっと森吉山」をどんなテーマパークに創り上げるのか、地域が一体となって取り組むための機運醸成が急務である。

(10) 十和田八幡平国立公園の分割の可否

①乳頭温泉郷組合等の十和田八幡国立公園分割議論

- ・北東北三県(青森・秋田・岩手)にまたがる十和田八幡田国立公園の十和田湖八甲田地域と八幡平地域は、時代が求める利用増進の使命を掲げ、共に地域経済の波及効果を求めて社会的連携を深めてきた。しかし発展的な地域のブランド力に視点を置いた分割論と名称変更の声が高まっている。
- ・集団施設地区に位置する乳頭温泉郷(乳頭山麓に点在する七つの宿・七つの湯)の関係者は、十和田八幡平国立公園の八幡平地域の分割議論を行っている。「一度は行ってみたい日本の温泉郷ベスト20」にランキングされる乳頭温泉郷としては、同じ十和田八幡平国立公

園の十和田湖八甲田ではない、八幡平地域の乳頭温泉郷のブランド化が視野にあるという。

- ・今は公園所在地の市町村と観光協会等の反応や温度差を探っている段階であり、いずれはシンポジウム等を開催し、具体的な分割議論を深めていきたいとのことだ。
- ・乳頭温泉郷の環境省所管のキャンプ場の案内板には「十和田八幡平国立公園 休暇村乳頭温泉郷 乳頭キャンプ場」と表記されている。しかし道路標識や休暇村の宿泊施設には、十和田八幡平国立公園の表記は無く、「ここは乳頭温泉郷」「休暇村乳頭温泉郷(National Park Resort)」と表記されているのみだ。国立公園のブランドが薄れた感が大きい。

②十和田八幡田国立公園の分割論は、東北三県の合意が必要

- ・この分割論は、今般のフォローアップとは別の観点から、環境省と3県の自治体、観光事業者や山岳関係者を交え、別ステージで大いなる議論を交わす時代を迎えている。
- ・大規模拡張地域に選定された森吉山を含む3公園の国立公園編入構想は、まずは拡張地域を定めた上で、十和田八幡平国立公園の「分割と未来を語る熱量」を見定めてからでも決して遅くはない。なぜなら八幡平地域のフォローアップは、まだまだ続くからだ。

(11) 北秋田市を北東北観光のハブ拠点に（未来へ 夢を形に）

- ・鷹巣阿仁部を一望できる空港と北欧の杜エリアは、北東北の十座十湯の観光拠点まで2時間以内でアクセスが可能である、北東北の内陸観光を巡るハブ拠点に成り得る立地条件を持っている。
- ・数万人のイベントが可能な北欧の杜には、既設のレストランやオートキャンプ場にホテルやアウトドアショップ(モンベル、コールマン、アシックス)の併設が出来ないだろうか。

<参考資料>

(1) 2022. 6. 18 御岳山シンポジウムにおける環境省の提言

- ・御岳山シンポジウムは、環境省のフォローアップ結果発表の4日後に、異例の速さで開催された。
 - ・長野県と岐阜県に跨る御岳山(3,067m)は23,322haで、国立公園の面積要件(30,000ha)に満たないが、地元では以前から「3,000mを超える独立峰で国立公園に指定されていない山は御岳山だけである」という国立公園昇格論が持ち上がっていた。
 - ・また、2014年に起きた御岳山の水蒸気爆発による死者・行方不明者は63人に上り、「戦後最悪の火山災害」となった。御岳山では山麓の復旧整備やシェルターなどの安全対策に迫られており、県立公園の昇格をその好機と捉えていた。
- ◎主催：木曾町、玉滝村、公益財団法人日本自然協会
- ◎後援：長野県、岐阜県、高山市、下呂市
- ◎テーマ：御岳山の価値と未来（国立・国定公園に向けて）
- ◎基調講演：「日本の山岳信仰と御岳の宗教文化」皇學館大学教授：中山 郁
- ◎話題提供：「国立・国定公園の今後の役割と発展」環境省国立公園課長：熊谷基之
「木曾町開田高原における保全活動の取組」木曾町環境協議会長：稲垣 康
「御岳山の価値と自然保護の課題」飛騨高山歩こう会会長：小野木三郎
- ◎パネルディスカッションで環境省自然環境局国立公園課長の熊谷基之氏は、地元の国立公園昇格論(単独又は中部山岳国立公園に編入)について答えた。

- ・今回のフォローアップで国立公園に新規指定(昇格)は日高山脈だけである。日高山脈が国立公園とした理由は2つある。
- ・日高山脈は既に国定になっている。今回は一段引き上げる形で国立とした。
- ・奄美大島国立公園も国定から5年後の2017年に国立に指定した。
- ・都道府県立公園から一気に国立公園になることは、普通はない。
- ・御岳山を中部山岳国立公園(北アルプス)に編入したいという考のようだが、今回は御嶽山の特質(3,000m級の独立峰、山岳信仰の歴史的優勢)にスポットを当てたものである。
- ・欧米の観光客は「スピリチュアルツーリズム」に感心がある。御岳山も世界文化遺産の熊野古道のような特色を生かした山岳観光を目指してはどうか。と結んだ。

(2) 国立公園の分割事例

- ・景観の保護と利用増進を目的にしてきた国立公園には、日光と尾瀬のように違うタイプが一緒だったり、東西に分離している上信越高原だったり、富士箱根伊豆のように場所が分かりにくいところが多い。環境省は2000年代に入り国立・国定公園の見直しを進めてきた。

①日光国立公園から尾瀬が独立

- ・尾瀬が日光国立公園内にあることを知らない人は結構いた。1997年頃から入山者が60万人から半減した。地元は「日光・尾瀬国立公園」にしてほしいと要望していた。
- ・尾瀬地域は、日本を代表する山地湿原やそれを取り囲む、燧ヶ岳や至仏山などの2000m級の山並みがあり、優れた景観と自然性に恵まれている。一方の日光地区は東照宮などの文化財目当ての観光客が多く観光色が強い。隣接はしているが植生や地形が別物のである。
- ・環境省は1997年に「名前だけではなく独立を考えたらどうか」と地元を持ち掛けた。一般観光よりも自然志向のニーズを背景に、国立・国定公園の見直しを進めている環境省は、尾瀬を国立公園再編のシンボルにしたいという待望があった。2007年に尾瀬は独立し尾瀬国立公園(37,200ha)が誕生した。

②上信越高原国立公園から妙高戸隠連山が独立

- ・上信越高原国立公園は、1949年に志賀高原・谷川・苗場・草津・万座・浅間地域(東部地域)が指定され、その後、1956年に妙高・戸隠地域(西部地域)が編入された。
- ・今回の総点検の結果、西部地域は東部地域とは異なる風景形式を有していることが明らかになった。また、利用面においてもそれぞれの地域が独立性・独自性を有している。
- ・以上により、火山・非火山の多様な山岳が密集し点在する高原、湖沼がこれと相まって一体的な自然景観を作り出し、自然景観及び利用状況の面で特質が異なる西部地域を分離し、2015年に妙高戸隠連山国立公園(39,772ha)が誕生した。
- ・上信越高原の西部地域と東部地域は約25km、十和田湖八甲田地域と八幡平地域は約45km離れ、同じく利用面においても両地域が独立性・独自性を有していることに鑑みれば、むしろ十和田八幡平国立公園の方が分割要件を優に満たしている感が大きい。